陳舜臣

異郷の檻のなか

人間の愛憎と復讐の姿に作家の暖かい
眼が光る！　日本と中国の深いきずな
の上に構成された「異色推理小説集」

異郷の檻のなか

陳舜臣

中央公論社

異郷の檻のなか

定価五二〇円

昭和四十六年三月十五日印刷
昭和四十六年三月二十五日発行

著者　陳舜臣

発行者　山越豊

印刷　三晃印刷

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

©一九七一　検印廃止

目次

異郷の檻のなか　5
永臨侍郎橋　83
囚人の斧　131
芙蓉の露　195
あとがき　260

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説集

異郷の檻のなか

異郷の檻のなか

1

七歳のときの記憶が、はたして確かであるかどうか？

個人差もあるだろうが、その記憶を植えつけた力の強弱、印象の濃淡の程度によってもちがうはずだ。裁判の例でも、幼児の証言は、あるときは採用され、あるときは確実性が疑わしいとして退けられる。

「まちがいありませんか？」

と、山口承二は念を押した。

サンフランシスコのチャイナタウンのはずれにある、キャセイ・ギャラリーのショーウィンドウの前である。

「まちがいありませんわ」

王少燕（ワンシャオイエン）はきっぱりした声で答えたが、彼女の視線はガラスケースのなかのものに釘づけされたままだった。

彼女は二十八歳になる。大学講師の肩書を持っており、けっして世間知らずの小娘ではない。整った顔のなかで、とくに澄んだ眼が印象的である。こう言えば本人は不服であろうが、どちらかと

いえば中年婦人的な、おち着いた美貌の持ち主だった。ところが、ふしぎなことに、なにかに緊張して顔をこわばらせたようなとき、彼女はかえってあどけなく見えた。少女らしい別種の美しさが、どこからともなくあらわれるのだ。

ちょうどいま、彼女の表情がそれであった。

山口はしばらく彼女の横顔に見とれた。

山口承二と王少燕は同窓であり、また同僚でもあるという関係だった。彼らはアメリカのW大学で社会学を専攻したが、同じ大学に付設されている東方研究所で、どちらもアルバイトに語学を教えている。もちろん山口は日本語、王少燕は中国語の教師である。王少燕は日本にもいたことがあるので、山口もなんとなく親しくなっていた。

山口がサンフランシスコに来たのは、カリフォルニア大学の研究室にいる高田という友人に会うのと、この地で開催されている趙第万(ちょうだいまん)の個展を見るためだった。

彼の父は京都の有名な古美術商だが、できることなら承二に家業を継がせたいと思っていた。承二は次男だが、長男は医者になってしまったし、三男は素質がなさそうなのだ。山口も美術好きだから、べつに家業を嫌っているわけではない。それに、社会学のほうも前途遼遠のかんじがするし、このごろでは、数代つづいた由緒ある家業を継ぐことを、ひそかに考慮しはじめて、その準備をしていたのである。

準備というのは、アメリカ各地の美術館を丹念に見てまわるといったようなことだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

サンフランシスコで個展をしている趙第万は、戦後南米に移住した中国人画家である。山水画とくに白描にかけては、当代随一といわれている。怪物的なところのある老画家で、十七世紀以来、中国の生んだ最高の画家という評価もあるほどだ。

山口はかねてこの画家に興味を持っていたので、高田に会うついでに、個展をのぞいてみようとしたのである。ところが、サンフランシスコに着いて、電話をしてみると、かんじんの高田はメキシコへ旅行中ということだった。まえもって連絡しなかったのはわるいが、高田もとつぜん思い立って旅に出たらしい。なにしろケント大学の反戦運動で、学生が射殺された事件の直後で、カリフォルニア大学もスト中だったのである。

(三十六計、逃げるにしかず。ややこしいときは消えてしまうにかぎるよ)

高田がかねてそんな処世術を揚言していたのを思い出して、山口はなるほどと苦笑したことである。

しかし、アテがはずれた。サンフランシスコでは、一日だけMホテルを予約してあった。一流ホテルであるが、宿泊料が高いのはいうまでもない。つぎの日から、バークレーにある高田の下宿にころがりこむ算段をしていたが、本人が留守ではしょうがない。W大学もスト中なので、高田の処世訓に従って、当分帰らないほうがよさそうだった。ただし、軍資金の問題があるので、とにかく安いホテルをさがすのが先決である。

到着した日はホテルにこもって外出を控えたが、翌朝、早くからダウンタウンへ出かけた。コーヒーショップのホットドッグで朝食をすませ、とりあえずユニオン広場のベンチに坐って一服した

のである。
趙第万の個展を先にするか、安宿さがしを先にするか、タバコの煙を空にむかって吹きあげながら考えた。――
(絵のほうはおち着いてから見るべきだ。だから、やはり、ホテルを先にきめよう)
だいたい方針がそうきまったとき、
「ショージ!」
と、声がかかった。
王少燕がベンチの真正面に立って、あでやかに笑っているのだった。彼女はまばゆいほど真っ白なスーツを身につけ、ミニスカートの下に、すばらしい線をもった長い脚が、屈託なく伸びている。
「やあ、これは……いったい、こんなところで……」
山口はそう言いながら、やっとのことで、彼女がサンフランシスコへ旅行したいと言っていたのを思い出した。同僚といっても、その勤務は時間に縛られないもので、ときには隣りのデスクの研究員と、一と月も顔を合わさないこともある。そういえば、山口はこの数日間、研究所で王少燕のすがたを見かけなかった。
彼は心のなかで、いそがしく彼女の旅行目的を思い出そうとした。彼女はたしかにそれをしゃべったことがあり、山口は、
――それは面白いテーマだね。しっかりやりたまえよ。
と励ましたおぼえさえあるのだ。

無責任な話だが、具体的にそれが何であったか、どうしても思い出せない。度忘れというのであろう。物見遊山ではなく、研究のための旅行であることだけはまちがいない。

「研究はうまく進行していますか？」

ともかく、山口はそうたずねた。まずは無難な問いかけである。

「ノー」と、王少燕は首を横に振って、「思ったより難しい仕事だわ。なにしろ百年も前のことですから、もちろん生存者はいませんしね。お祖父さんから話をきいたことがあるという老人が、何人かいましたけど……」

「そりゃ、大へんだなあ」

山口はやっと思い出した。

王少燕という中国出身の女流社会学者は、セントラル・パシフィック鉄道建設に従事した、一万四千人の中国人労働者のことを、取り上げようとしていたのだ。とくに彼女は、男ばかりの労働移民グループが、セックスをどのように処理していたかという点に、興味をもっていたのである。

しかしながら、彼女の口調から察すると、あまり成果はなかったらしい。

「でもね」と、彼女は気を取り直したように言った。――「資料はかなり集まりそうだわ。……例の大陸横断鉄道関係の……去年が百年記念でしたから、わりあい関心がたかまっていたのね」

「なるほどねえ」

と、山口はうなずいた。

大陸横断鉄道が開通したのは、一八六九年五月十日だから、去年がちょうど百周年になるわけだ。

「で、ショージ、あんたは？」
と、王少燕はきいた。
「友人に会いに来たんだけど、すれちがいましたよ。それで弱ってるんです」
山口は足もとに置いたバッグを取り上げて、膝のうえにのせ、事情をかんたんに説明した。
「ホテルなら、あたしの泊ってるところがいいわ。あたしの特別料金を、あんたにも適用させてあげるから」
王少燕はそう言って、山口の横にならんで腰をおろした。
「特別料金って、いくらほどかな？」
「一日五ドル。税金なしよ」
「それは安いなぁ」
Mホテルは二十ドルで、おまけに税金がつくのである。
「場所もわるくないわよ。チャイナタウンのなかだもの」
「じゃ、お願いしようかな」
「いいわ」
こんなふうにして、山口と王少燕は偶然会ったのにすぎない。とにかく、お茶でも飲もうということになって、山口はまたコーヒーショップにつき合わされた。そこは中国人の経営している店らしく、王少燕はウエイトレスと知り合いで、親しそうにことばを交わしていた。
二杯目のコーヒーを飲みながら、山口は趙第万の展覧会へも行きたいのだ、と言った。

「あら、あたしも見たいと思ってたのよ。ね、これから行きましょう。キャセイ・ギャラリーというのは、ここからそんなに遠くないのよ」

彼女は思い立つと、すぐに実行に移さねば気のすまない性質である。

山口はその店にバッグを預けて、王少燕のうしろについて行った。

チャイナタウンにはいってから、彼女は公衆電話のボックスにはいった。そのあたりの公衆電話は、すべて中国ふうのそりかえった朱塗りの二重の屋根を持っている。電話ボックスだけではなく、ガソリンスタンドまでそんなふうである。はじめてサンフランシスコに来たとき、山口はそのガソリンスタンドを、中国の寺院とまちがえたほどである。

ボックスから出てきた王少燕は、にっこり笑って、

「OK!」

と、指でVサインを示した。

彼女のいう安ホテルに、部屋の予約が取れたのである。その笑顔からみて、特別料金の件も話がついたらしい。

それから二人は、肩をならべてキャセイ・ギャラリーにむかった。

少燕の言ったとおり、あまり遠くない。

ギャラリーのドアの横に、長い赤紙が貼ってあり、そこにすばらしい達筆で、

『国画大師趙第万大先生芸術展覧会』

としるされてあった。

「大袈裟だわねえ」
彼女は鼻のさきで、ふンと言ったようである。そして、なにかけがらわしいものでも見たように、眼をそむけた。新しい時代の女性らしく、彼女は真っ赤な紙や、『大師』や『大先生』ということばに、抵抗をかんじたのであろう。
ところが、眼をそらしたとたんに、彼女のようすが、とつぜん変わったのである。
彼女の視線は、赤紙のけばけばしさを避けて、すぐそばのショーウィンドウにむけられていたわけだ。
彼女にある種のショックを与え、それによって表情まで変えさせたものが、ショーウィンドウにあることは察しられた。
「どうしたんですか？」
と、山口はたずねた。
少燕はしばらく答えなかった。彼女は思わず、息をのんでいたのである。やがて、かすれた声で言った。——
「これ、あたしの家にあったものだわ。上海のあたしのところに……」
「ほんとですか？」
と、山口はショーウィンドウをのぞきこんだ。ガラスのウィンドウのなかに、高さ八十センチばかりのガラスケースが置いてあるのは、なんとなく重複したかんじで、小うるさく思えた。
ところが、ケースのなかのものを見ると、そうした違和感は、ふしぎにすうっと消えてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com